

二〇二二年二月一日

台杉の秀へかんざしに散り紅葉  
さざ波を揺りかごとして浮き寝鳥  
陣解きてよりゆるゆると鴨遊ぶ  
出棺の空に褪せゆく冬の虹  
老松の迫り出す崖へ冬怒濤  
磯の香を腹まで吸ふてひじき刈る  
日向ぼこ小さいさくなりし夫の背ナ

明日香  
せつ子  
もとこ  
なつき  
宏 虎  
千 鶴  
やよい

二〇二二年二月九日

闘病の部屋の奥まで冬日燦  
小春波川面のビルのふにやふにやに  
枯菊といへど仄かに香りけり  
三和土まで射し届きたる冬至の日  
スプーンを添へて熟柿を老い母へ  
手を振るや水都をめぐる遊船に  
打たせ湯のごと肩に置く冬日差  
海光の眩しき沖に鰯漁船  
冬風の浦一面に朝日燦  
自販機の吐き出すコイン星凍る

やよい  
明日香  
満 天  
みきお  
あひる  
もとこ  
たか子  
千 鶴  
千 鶴  
素 秀

二〇二二年二月八日

干柿を揉む甘くなれ柔くなれ  
薄氷割りて掬ひし手水かな  
白菜を漬けてはみ出す桶の縁  
歳晩や多めに貰ふ処方薬  
父知らぬ人生を生き開戦日

やよい  
智恵子  
ぼんこ  
せいじ  
たか子

二〇二二年二月七日

師走とて天井裏も賑々し  
太梁の築百年の隙間風  
露天湯の岩に張りつく紅葉かな  
介護メモ読み返しある炬燵かな  
新暦先づは家族の誕生日

せいじ  
千 鶴  
せつ子  
なつき  
智恵子

二〇二二年二月六日

引力に負けて地に落つ冬の蝶  
隼人瓜もらふ里山ハイキング  
湖涸れて古銭うち上ぐ遙拝所  
海鳥の白き骸や冬の浜

明日香  
む べ  
隆 松  
素 秀

二〇二二年二月五日

顔見世の棧敷彩る芸舞妓  
北風におでこぶつけてペダルこぐ  
丹精の小菊を剪りて棺へと  
納棺の父の軽さや菊白し  
立て看板ドミノ倒しに空つ風

凡 士  
あひる  
なつき  
なつき  
たか子

二〇二二年二月四日

猪鍋は夫の十八番の味噌仕立て  
新藁を敷きし厩舎に仔馬起つ  
焼芋屋買ひ迷ふうち行き過ぎね

千 鶴  
凡 士  
満 天

毎日句会みのる選・二〇二二年二月二日